

## キャラクター・プラス

### — 米国ミズーリ州における地域連携型道德教育の取り組み —

小 柳 正 司〔鹿児島大学教育学部（教育学）〕

#### The Comprehensive Approach to Character Education and the Community Partnership — In the Case of CHARACTERplus Project in Missouri, U.S. —

KOYANAGI Masashi

キーワード：キャラクター・エデュケーション、人格特性、学校・家庭・地域の連携、指導者研修、  
評価と診断

#### はじめに

筆者は、平成16年度文部科学省海外先進教育実践研究支援プログラムにより、2005年3月末から9月末までの6ヶ月間、米国のミズーリ大学セントルイス校（University of Missouri - St. Louis）において「道德教育の教員養成プログラム開発」に関する調査研究をおこなった。「道德教育の教員養成プログラム開発」そのものについては別途に考察することにして、本稿では、ミズーリ州で1988年以来取り組まれているキャラクター・プラス（CHARACTERplus）と呼ばれる地域連携型道德教育のプロジェクトについて紹介することにした。というのも、ミズーリ州のこのプロジェクトは全米の中でも先進的なものの一つとして高く評価されているからである。

キャラクター・プラスでは、道德教育を単に学校の一つの科目や領域として扱うのではなく、道德教育を各教科のカリキュラムの中に組み込み、さらには生徒たちの学校内外における諸活動を通じて、総合的に道德教育を推進していこうとするところに特徴がある。そして、学校におけるこうした道德教育の取り組みを、地域の公共機関や企業が支援するような態勢がつくられている。それとともに、キャラクター・プラスではミズーリ大学セントルイス校の教育学部（College of Education）などとも連携して、それぞれの学校現場でこのプロジェクトを推進する指導教員の研修および支援の態勢がとられている。そこには、道德教育の推進と、教員の一般的な資質向上——授業技術の向

上とともに人格面を含めた教員の資質向上——とが切り離せないという考えが見られる。こうした教員研修のプログラムに対しても、大学だけでなく、地域の企業や公共機関などが積極的に支援をおこなうようになっていて、道德教育の推進が学校関係者だけの閉じた領域になっていないところが、キャラクター・プラスの大きな特徴となっている。

以下、ミズーリ州のキャラクター・プラスの取り組みについて、その基本目標、取り組み内容、推進態勢等について、筆者が知りえたかぎりで紹介をおこないながら、現在米国で取り組まれている地域連携型道德教育の特色と課題について考察を加えることにしたい。

#### 1. キャラクター・プラスの基本目標

キャラクター・プラスは、セントルイス大都市圏（St. Louis metropolitan area）の学区連合（Cooperating School Districts）が取り組んでいるキャラクター・エデュケーション（Character Education）のプロジェクトである。学区連合というのは、セントルイス大都市圏の30の学区が共同で運営している非営利の機関である<sup>1)</sup>。

キャラクター・エデュケーションは、ミズーリ州にかぎらず、いま全米各地で公立学校をいじめ（bullying）や暴力のない安全な学習環境に変える一種の学校再生運動として取り組まれている。キャラクター・エデュケーションは、日本の小・中学校でおこなわれている学校の全教育活動を通

じての道德教育という考え方に近い内容をもっており、アメリカの従来のモラル・エデュケーション (moral education) とは一線を画している。従来のモラル・エデュケーションが、どちらかといえば道德についての学習という側面が強かったのに対して、キャラクター・エデュケーションは生徒一人一人の行動に働きかけ、道德的な実践態度を形成するという側面が強い。キャラクター・エデュケーションの“character”という用語は“moral”に対する“virtue”、つまり「すぐれた人格特性」(good character traits)といった意味を含んでいるようである。

キャラクター・プラスは、こうしたキャラクター・エデュケーションの取り組みを、セントルイス拡大都市圏さらにはミズーリ州および隣接するイリノイ州の一部において普及させるために、学区および学校現場を支援するさまざまな企画を用意している。それらの具体的な内容については後で紹介する。

キャラクター・エデュケーションは、特定の哲学や教育理論に依拠するものではなく、先に述べたように、公立学校の秩序回復を図る一種の学校再生運動という性格をもっている。キャラクター・プラスでは、それぞれの学区あるいは学校現場がキャラクター・エデュケーションに積極的に取り組むことができるようにするために、教材・教具の提供などの物的支援と、指導者研修などの人的支援をおこない、学校現場の実践のなかからすぐれた実践例を収集して、それらをテキスト化し、キャラクター・エデュケーションの実践のさらなる洗練と普及をおこなっている。2005年初めの段階でキャラクター・プラスに参加している学区は、セントルイス拡大都市圏を中心にミズーリ州とイリノイ州の一部を合わせて100学区を超え、学校数では小学校、ミドルスクール、ハイスクールを合わせて600校を超え、教員数で2,500人以上、生徒数で30万人以上をカバーしている。

#### キャラクター・プラスの10ヶ条

キャラクター・エデュケーションでは、コアとなる倫理的価値 (core ethical values) を設定し、

それらのコア価値について、知的理解と、心情的理解と、実践意欲の形成の三側面にわたって、総合的に道德教育を進めようとしている。そのために、キャラクター・エデュケーションでは、文学や歴史、社会科、理科といったアカデミック教科の学習をはじめとして、教科外の諸活動、さらには学校外の地域活動の中で、生徒たちが不断にコア価値にかかわることができるように、学校の教育活動全体を計画的に組織するようになっている。

コアとなる倫理的価値は、例えば「誠実」「責任」「自制」のような人格特性 (character traits) を表わすものであるが、具体的にどのようなコア価値を設定し、どのような教育プログラムを用意するかは、基本的にはそれぞれの学区あるいは学校が独自に決定することになっている。しかし、キャラクター・プラスでは、各学区ないし学校がキャラクター・エデュケーションに取り組むに際してのガイドラインとして、以下のようなキャラクター・プラスの10ヶ条を設定している<sup>2)</sup>。

##### 1. 合意形成

教師、親、生徒、地域住民の間で、キャラクター・エデュケーションに取り組むための幅広い合意を形成すること。

##### 2. ポリシー

学区の目標ないしは基本政策の中にキャラクター・エデュケーションを位置づけること。そして、キャラクター・エデュケーションが学校、家庭、地域を貫く教育上の一つの大きな指導指針となること。

##### 3. コア価値の設定と定義づけ

どのような人格特性 (character traits) を取り上げ、それらの人格特性をどのように定義づけるかについて、親と教師と地域代表が協議して合意すること。一つ一つの人格特性をどう定義づけ説明するかは決定的に重要である。協議のはじめの段階から生徒の意見を取り入れることは有意義である。

##### 4. 統合型カリキュラム

キャラクター・エデュケーションを全学年段階の教科カリキュラムの中に統合すること。個々の人格特性を教科の授業に関連づけて取り上げ、例

えばある人格特性が文学作品の中にどのように表現されているかを学習したり、理科の実験に取り組む際に必要な人格特性について話し合ったりするなど、教科の授業の中で人格特性について理解を深める機会を設けること。

#### 5. 体験学習

生徒が人格特性を実際に体験したり実践したりするためにさまざまな活動を用意すること。教科カリキュラムの中にも人格特性を具体的に体験する活動を取り入れること。特に、サービス・ラーニング (service learning)<sup>3)</sup>、共同学習 (cooperative learning)<sup>4)</sup>、ピア・メンタリング (peer mentoring)<sup>5)</sup> は有効である。討論と反省に十分な時間をかけること。

#### 6. 評価

キャラクター・エデュケーションの実施過程、プログラムの実践、生徒への影響のそれぞれについて評価をおこない、評価データをプログラムの改善に役立てること。

#### 7. 大人による模範

普段子どもと接触しているすべての大人は、家庭・学校・地域のあらゆるレベルで人格特性の模範を示すこと。そのために、大人たちは主要な人格特性について注意を注ぎ、意識してそれらの模範を示すべきである。もし大人たちが行動で模範を示すことができなければ、キャラクター・エデュケーションの取り組み全体が水泡に帰す。

#### 8. スタッフの育成

キャラクター・エデュケーションの実施過程を把握し、カリキュラムの開発や授業プランの作成などに当たるスタッフの育成に、時間と資金を適切に配分すること。

#### 9. 生徒の参加とリーダーシップ

教科の学習やその他の諸活動において、生徒が年齢に応じて自ら役割を担うようにし、キャラクター・エデュケーションを彼らの学習活動や意思決定や個人目標の達成と結びつけるようにすること。

#### 10. プログラムの持続的発展

以上の9か条の実行を通してキャラクター・エデュケーションを持続的に発展させていくこと。その際、特に配慮すべき点は、トップに立つ人の

率先躬行、十分な資金、高度な実践的専門性の育成、教師を支援するネットワークの構築である。

### キャラクター・エデュケーションの特徴

以上の10ヶ条からは、キャラクター・プラスが推進するキャラクター・エデュケーションのおよその特徴が理解できる。

第1に、キャラクター・エデュケーションは学校の教育活動の一部あるいは一領域として取り組まれるのではなく、学校の教育活動全体を統括する目標あるいはポリシーとして位置づけられている。そのために、各学校は、教科カリキュラムをはじめとして、教科外の諸活動、学校外の地域活動、さらには親や地域の人たちとの連携を含めて、生徒たちの学習と生活のあらゆる場面を通じて、人格特性の育成に総合的に取り組む態勢を組むことになっている。

第2に、キャラクター・エデュケーションでは、育成すべき人格特性を学校の全教育活動のコアとして設定する。これは、たとえば「個性輝くたくましい子」のような抽象的な題目を掲げることではなく、「誠実」「責任」「自制」のようなめざすべき人格特性の一つ一つについて達成目標を具体的に設定することである。たとえば「誠実」とはどういうことをおこなうことなのか、何をおこなえば「誠実」と評価されるのかを明確に示すのである。これは一歩間違えば、行動のマニュアル化にもなりかねないが、人格特性の設定と定義づけは、先の10ヶ条の第3にあるように、教師・親・地域代表が協議して多様な意見を入れ、合意を得ることになっている。さらに実際の教室の中では、クラス・ミーティングを通じて、あるいは教科の授業の中で討論の時間を取って、生徒たちがたとえば「誠実」という人格特性について彼ら自身の解釈と評価をおこなうようになっている。

第3に、キャラクター・エデュケーションでは体験を通して人格特性を学ぶことが重視されている。キャラクター・エデュケーションでは、人格特性を単に知的に理解するだけでなく、心情的にも理解し、さらには実践意欲に結びつけるように、知・情・意の各側面にわたって働きかけるこ

とが特に重要だとされている。生徒たちは、学校内・学級内の諸活動や地域での活動ばかりでなく、教科の授業においてさえも、必ずなんらかの役割や責任を担い、活動・体験を通して自己を見つめ、他者とのかかわりを反省し、具体的な実践場面での自らの行動をもとにして人格特性の意義を理解することが求められる。

### キャラクター・プラスの歴史

キャラクター・プラスは、セントルイス拡大都市圏の学区連合 (Cooperating School Districts) が1988年に開始したキャラクター・エデュケーションのプロジェクトである。開始からすでに17年ほどの歴史をもっている。

最初は、マクダネル・ダグラス社会長のサンフォード・マクダネル氏 (Sanford N. McDonnell) が中心になって、有志の学校関係者と父母、それに企業代表者が協議して、公立学校でキャラクター・エデュケーションを推進するために、Personal Responsibility Education Process と呼ばれるプロジェクトを発足させた。これは公立学校で「責任ある市民」の育成に取り組むプロジェクトで、7つの学区が参加し、これに4つの企業が活動資金を提供した。翌年 (1989年) には参加学区は14になった。

1992年に連邦教育省がこのプロジェクトに80万ドルの補助金を提供し、キャラクター・エデュケーションを教科カリキュラムの中に統合するパイロット事業が開始された。翌年 (1993年)、マクダネル氏によって全米各地のキャラクター・エデュケーションを支援する Character Education Partnership が組織され、Personal Responsibility Education Process はその傘下のプロジェクトとなった。

1997年に連邦教育省は Personal Responsibility Education Process に対して再び補助金を提供し、キャラクター・エデュケーションをセントルイス拡大都市圏からミズーリ州全体に拡大する事業が開始された。1999年に Personal Responsibility Education Process は発足10周年を迎え、名称を CHARACTERplus に改めた。

上記の連邦補助金事業が終了する2001年に、ミ

ズーリ州議会はこの事業を継続するために補助金の支出を決定した。

2002年に CHARACTERplus は新たに2つの4年間の連邦補助金を得た。一つはキャラクター・エデュケーションをミズーリ州全体に拡大する事業を継続するための補助金であり、もう一つはセントルイス拡大都市圏において新たに“Caring School Community”という学校再生のモデル校をつくる事業への補助金である。“Caring School Community”とは、あえて日本語に訳せば「心の通いあう学校」とでもいう意味で、キャラクター・エデュケーションをととして学校全体を安全で快適な秩序ある学習環境にする取り組みを意味している。

現在、キャラクター・プラスでは上記の州補助金と2つの連邦補助金を使って、キャラクター・エデュケーションに関する学校診断のデータベース作り、およびキャラクター・エデュケーションが学校環境の改善と学業成績の向上におよぼす影響についての調査研究を進めている。このことについては第4節で詳しく説明する。

## 2. キャラクター・プラスによる学校支援事業

キャラクター・プラスは、基本的には、キャラクター・エデュケーションに取り組む学校ないしは学区を支援する事業である。キャラクター・エデュケーションを実施するかどうかは、あくまでも各学校ないしは学区が教員と父母と地域住民代表が協議して決定することになっており、キャラクター・プラスはキャラクター・エデュケーションに取り組む学校ないしは学区に対して、情報提供や教材・教具の提供、指導者研修、学校診断などの支援をおこなっている。

以下は、キャラクター・プラスが主としてセントルイス拡大都市圏を対象にしておこなっている支援事業の内容である。

### (1) 専門性の育成

キャラクター・プラスの学校支援事業の中で一番中心となっているのは、キャラクター・エデュケーションに取り組む学校ないしは学区の指導的

なスタッフの専門性を高める企画である。指導的なスタッフには、校長をはじめとして、指導主事、カウンセラー、父母代表などが含まれている。キャラクター・プラスでは、これまでの経験から、特に学校現場において校長を中心とする指導チームがしっかりとリーダーシップをとることが、キャラクター・エデュケーションの成功の鍵であると認識されている。

専門性を高める企画としては、以下のものがある。

#### ①学区指導者協議会

セントルイス拡大都市圏では、毎年9月から4月までの第2火曜日に、学区指導者協議会（District Leaders Council）を定期的に関することになっている。ここでは各学校でのキャラクター・エデュケーションの取り組みに関する意見交換や成功例の紹介などをおこなっている。

#### ②指導者講座

キャラクター・プラスでは、サンフォード・マクダネル氏とサウスウエスト・ベル電話会社（Southwest Bell Telephone）およびバンク・オブ・アメリカ（Bank of America）からの資金提供を得て、指導者講座（Leadership Academies for Character Education）を開催している。これは、キャラクター・エデュケーションに取り組んでいる、あるいはこれから取り組もうとする学校の校長あるいは校長補佐（assistant principal）を対象にした講座で、キャラクター・エデュケーションの実施計画の策定や学校全体の取り組み体制の構築、校長（校長補佐）のリーダーシップなどについて学ぶことになっている。そして、参加者たちはこの指導者講座を通じて、キャラクター・エデュケーションについて共通の理解を獲得し、各校での実践について互いに情報交換をおこなう指導者ネットワークを結ぶことになる。これもこの講座の重要なねらいになっている。

この講座は年間をとおして開催されている。講座の内容としては、キャラクター・エデュケーションを実施するにあたって必要なリーダーシップのスキルの習得、学校全体の取り組み体制の構

築や実施計画の策定についてのワークショップ、キャラクター・エデュケーションの著名な専門家による講習と実践の診断、キャラクター・エデュケーション関係の文献レビュー、キャラクター・エデュケーションの全国的な研究大会への参加などがある。

なお、この講座の実施にあたっては、ミズーリ大学セントルイス校とウェブスター大学（Webster University）が、講師の派遣などにおいて全面的に協力している。前記のように資金的には企業の支援があり、企画の実施にあたっては地元の教員養成機関の協力があり、このように産・学との連携を図りながら、キャラクター・エデュケーションの推進・普及につとめている点は、キャラクター・プラスの大きな特色である。

#### ③特別研修講座

キャラクター・プラスでは、年間を通じて“Advanced Training Series”と呼ばれる特別研修講座を開設している。各講座は、1日ないし2日間にわたるスキル・トレーニングのワークショップが中心で、有料でだれでも自由に参加することができる。ちなみに2005 - 2006年度に開設される講座は以下のとおりである。

##### 「全米教育協会（NEA）いじめ・セクハラ防止プログラム」

2005年9月27 - 28日 8:30 - 16:00 300ドル

この講座では、学校ごとにチームで参加し、NEAの専門家の指導のもとで、いじめとセクハラに対処する対策をチームで話し合い、実際の対処法をワークショップ形式で学ぶ。

##### 「キャラクター・プラスの10ヶ条の实地研修」

2005年10月20日 9:00 - 15:00 150ドル

この講座では、キャラクター・プラスの10ヶ条に即して、これまでに実践で有効性が確かめられたキャラクター・エデュケーションの手法について学ぶ。この講座の受講者には教員資格のステップアップのための認定（Certification）が与えられる。

「キャラクターの発達と教育」

2005年11月16日 9:00 - 15:00 150ドル

この講座では、ミズーリ大学セントルイス校教育学部のマービン・バーコビッツ (Marvin Berkowitz) 教授<sup>6)</sup>が、発達心理学の観点から、小学校、ミドルスクール、ハイスクールの各学校段階におけるキャラクター・エデュケーションの戦略を、具体的な実践例にもとづいて解説する。この講座の受講者には教員資格のステップアップのための認定が与えられる。

「キャラクター・エデュケーションの効果的な教育方法」

2006年1月26日 9:00 - 15:00 150ドル

この講座では、上記のマービン・バーコビッツ教授が、クラス・ミーティング、異学年交流活動、学級自治活動、道徳的会話法などから具体例を取り上げて、信頼、友情、協力を築くためのキャラクター・エデュケーションの戦略を解説する。この講座の受講者には教員資格のステップアップのための認定が与えられる。

「ミズーリ州学校改善事業とキャラクター・エデュケーション」

日程は未定 9:00 - 11:00 75ドル

この講座では、ミズーリ州学校改善事業 (Missouri School Improvement Project) で学校評価を担当しているロン・ベリー (Ron Berrey) 博士が、キャラクター・エデュケーションの取り組みに関するデータづくりや、報告書の作成について手順を解説する。

「効果的なクラス・ミーティング」

2006年2月20日 9:00 - 15:00 150ドル

この講座では、上記のマービン・バーコビッツ教授が、クラス・ミーティングのダイナミズムについて心理学の観点から解説し、そのあとクラス・ミーティングをパワフルで有意義なものにするためのさまざまなスキルを、参加者に実際に体験してもらう。

「道徳的会話の指導法」

2006年4月6日 9:00 - 15:00 150ドル

この講座では、上記のマービン・バーコビッツ教授がモラル・ディスカッションと道徳的発達との関係を説明し、人々との会話を刺激し深めるためのテクニックを紹介する。そして、会話の雰囲気を経験的なものにするためのスキルを参加者に実演してもらう。

④講演会

キャラクター・プラスでは、キャラクター・エデュケーションの全国的に著名な専門家や実践家を招いて、年数回講演会を開催している。ちなみに2005 - 2006年度に開催される予定の講演会は以下のとおりである。

「校長の視点から見た最良の実践」

2005年10月11日 9:00 - 15:00

これは、キャラクター・エデュケーションの実践で全国表彰を受けたことがある学校の校長12名を招いて研究討議をおこなうものである。

「学業成績格差を理解する指標」

2006年1月10日 8:30 - 15:30

リタ・ピアソン (Rita Pierson) 博士の講演

以下は、日程、講演者とも未定である。

「キャラクター・プラスの10ヶ条の基本要素」

「キャラクターの発達と教育」

「キャラクター・エデュケーションの効果的な実践」

⑤研究大会

毎年7月にセントルイスのダウントウンにあるホテルを会場に、キャラクター・プラスの研究大会が3日間にわたって開かれる。参加は有料で自由であるが、キャラクター・プラスの会員となっている学区には2名ないし3名分の参加派遣費用がスカラーシップとして支給される。この研究大会はかなりの規模でおこなわれる。ちなみに2005年の場合、研究大会開幕前のプレ企画として、9つの現職教員向けのセミナーと、2つの教職志望

学生向けのセミナーがあり、開幕後にはグループまたは個人による研究発表が50本、全国各地から招待されたキャラクター・エデュケーションの専門家による講演が5本あり、そのほかキャラクター・エデュケーションに関係する書籍や教材・教具の展示が25ブース用意された。

## (2) 評価と診断

キャラクター・プラスがおこなっている学校支援事業のうちで、専門性の育成について重要なものは、各学校のキャラクター・エデュケーションの取り組みに対する評価と診断をおこなう事業である。

キャラクター・プラスは、1997年から4年間、連邦教育省の補助金を受け、2001年からは州の補助金を受けて、キャラクター・エデュケーションをセントルイス拡大都市圏から州全体に拡大する事業に取り組んでいるが、評価と診断の事業はこの拡大事業の一環として開始された。“Missouri Character Education Project”と呼ばれるこの拡大事業では、キャラクター・エデュケーションに取り組もうとする44学区80校を選び、1年目に各校5人ずつのチームを2日間の地区研修（regional training session）に派遣し、キャラクター・エデュケーションの10ヶ条と、各校の現状を示す基礎データにもとづいて、州の普及員（facilitator）の指導により、各校で次年度から取り組むキャラクター・エデュケーションの実施計画を策定した。各校から派遣された5人のチームは、校長・校長補佐などの学校管理職者、教員、父母、地域のメンバーといった人々で構成されている。2年目と3年目には、州の普及員の支援を受けながら、実際に各学校でキャラクター・エデュケーションの実践に取り組み、キャラクター・プラスの10ヶ条に沿った評価項目と基準にしたがって実施計画の点検をおこなった。評価は、教員とそのほかの学校職員、生徒、父母のそれぞれから、評価項目ごとに点数をつけてもらう形式でおこなわれた。2年目の終了時点で、地区ごとに各学校のチームが集まって、各校の評価の結果を持ち寄り、普及員による診断と助言を受けながら問題点や改善策を相互に検討しあい、各校の次年度の実

施計画を練り上げて3年目の実施に移った。そして、3年目の終了時点で、各校の代表者が集まってフォーラムを開き、キャラクター・プラスの10ヶ条に沿って、それぞれの実践の成功例を紹介しあった。

キャラクター・プラスでは、このように指導者研修と組み合わせる形で、キャラクター・プラスの10ヶ条にもとづく実践の評価と診断、改善の指導がきめ細かくおこなわれるようになっている。

現在では、チームによる2日間の研修は州全体に拡大され、希望する学校は自由に参加することができるようになっている。さらに、評価・診断は、器材や印刷物などのツール一式と、コンピュータによるデータ解析、専門家による分析と診断、報告書の作成、改善指導の研修の全部を合わせて、1校あたり1200ドルの費用がかかるところを、キャラクター・プラスの会員学区に対しては、これを1校あたり400ドルで実施している。キャラクター・プラスでは、これまでの経験から、評価・診断は1学区で1校を選び、小規模にきめ細かくおこなうのが、時間とコストとマンパワーの点からみて最も効果的であると判断している。当然のことながら、1校での評価・診断結果は、キャラクター・プラスに参加する他校での改善にも役立てられる。

実際の評価・診断にあたってデータを取るのには、小学校では第4学年、ミドルスクールでは第8学年、ハイスクールでは第11学年の生徒200人まで、学校の教職員50人まで、父母100人までである。それぞれに評価項目ごとに点数をつけてもらい、集計されたデータをコンピュータで解析して、分析結果と専門家の診断を報告書にまとめ、学校側に提供するようになっている。そして、最後に、学校の指導的なスタッフに対して、報告書の分析と診断を改善に役立てるための研修をおこなう。

## 3. 地域連携事業

キャラクター・プラスの大きな特徴となっているのは、キャラクター・エデュケーションを推進するにあたって、地域社会との連携を積極的に図っていることである。“community partnership”

と呼ばれるこの種の事業は、キャラクター・エデュケーションに取り組んでいる学校に対する支援事業でもある。これは、キャラクター・エデュケーションを単に学校や学区の教育関係者だけの取り組みにとどめず、生徒たちの日常生活の場である地域社会の関心をキャラクター・エデュケーションに向けさせ、生徒たちを取り巻く大人社会全体で学校のキャラクター・エデュケーションを支えていく態勢を取ろうとするものである。

キャラクター・プラスが現在おこなっている地域連携事業には、以下のものがある。

### (1) 学校表彰

キャラクター・プラスでは、プロ野球大リーグの地元チーム、セントルイス・カーディナルス (St. Louis Cardinals) が子どもたちのために設立した地域財団 (Cardinals Care) と協同で、毎年 “Champions For Character” と呼ばれる学校表彰の企画を実施している。これは、セントルイス拡大都市圏の学校のうちから、サービス・ラーニングのすぐれた取り組みをしている学校を、小学校、ミドルスクール、ハイスクールのそれぞれから1校ずつ選び、表彰するものである。表彰の対象となるのは、サービス・ラーニングに全校規模で取り組み、著しい成果をあげた学校である。

サービス・ラーニングというのは、註の3でも説明したように、アカデミック教科の学習内容に関連した地域貢献活動を組織して、授業カリキュラムの一部に計画的に組み込み、実地体験を通して教室での学習に動機づけを与え、問題発見や問題解決などの高度な学習スキルを身につけさせる新しい学習方法である。地域貢献活動としては、たとえば理科の授業の一環として、地域の環境調査や環境保全活動を、自治体や企業の職員と一緒にこなうものなどがある。サービス・ラーニングでは、こうした学習過程を通じて、積極的な学習態度の形成を図るとともに、社会の一員としての自覚と責任を喚起し、さらにはさまざまな人々との接触の中で対人関係を鍛えることなどをねらいとしている。この点で、サービス・ラーニングは、体験重視の統合型道徳教育を進めるキャラクター・エデュケーションと密接につながってい

て、表裏一体の関係をもっている。

この “Champions For Character” の学校表彰では、サービス・ラーニングを、教科カリキュラムはもとより学校の教育活動全体の中に計画的に組み込み、一つの学校文化としてサービス・ラーニングに取り組んでいることを特に選抜の規準としている。

興味深いのは、選抜された学校の生徒と教職員全員がカーディナルスの試合に招待され、試合開始前に観客の前で表彰式がおこなわれることである。カーディナルスは地元市民が誇りにしている大リーグの名門チームであり、生徒たちにとってはあこがれのチームでもある。そのカーディナルスの試合がおこなわれる球場で表彰のセレモニーがおこなわれ、選手と大観衆から祝福を受けることは、生徒たちばかりでなく学校の教職員や父母、さらには学区の教育行政関係者にとっても大変な名誉である。

このような形で、キャラクター・プラスでは地元プロ野球チームの協力を得て、学校の取り組みとその成果を公開の場で地域の一般の人々にも広く知らしめ、各学校の努力に対して正当な評価と賞賛を与える機会としている。

### (2) 作文コンテスト

キャラクター・プラスでは、STLtoday.comと協同で、セントルイス拡大都市圏のミドルスクールとハイスクールの生徒を対象に “Laws of Life Essay Contest” という作文コンテストを実施している。STLtoday.comというのは、地元新聞セントルイス・ポスト・ディスパッチ (St. Louis Post-Dispatch) のインターネット・オンライン部門である。

“Laws of Life Essay Contest” は、生徒たちに、現在の自分に影響を与えた人物や出来事、学んだ教訓などについて、自由なテーマで短いエッセイを書かせ、人生にとって大切な価値とは何かを、自分のこれまでの経験を振り返りながら考えさせる取り組みである。コンテストの名称になっている “Laws of Life” とは、人生を決定づける倫理的価値のことを指しており、キャラクター・エデュケーションで取り上げられるコア価値とほ



ば同等である。この作文コンテストがキャラクター・エデュケーションの一環として利用されるのもそのためである。

もともとこの作文コンテストは、1987年にテネシー州の片田舎で一人の教師が始めたものであるが、現在では米国内の約60ヶ所とカナダの3ヶ所で取り組まれている。そして、米国・カナダ以外でも日本を含む世界33カ国で試みられている。作文コンテストについては国際ガイドラインが一応存在するが、実際の作文コンテストは各地の実施団体がそれぞれ独自におこなうようになっている。

セントルイス拡大都市圏の場合は、上記のようにキャラクター・プラスとSLTtoday.comが協同で実施している。ここでは、通常のコンテストのように優秀なエッセイを選んで賞を与えることはしないで、エッセイを書くプロセスを重視しており、投稿されたエッセイのすべてをSLTtoday.comのウェブサイトに掲載し、一般の人々に向けて青少年の考えや主張を発信することをねらいとしている。その実施手順は以下のようになっている。

第1に、作文コンテストは、学校で教師が生徒の教育のために利用することを前提としている。そのため、まず教師が作文コンテストのコーディネーターになることを申請する。そして、コーディネーターとして登録された教師が生徒にエッセイを書かせる。たとえば、倫理学や国語の授業の課題として書かせたり、あるいはサービス・ラーニングを終えたあとの報告文の一つとして書かせたりする。あるいは、卒業記念のエッセイとして書かせたり、学校誌や学級誌の記事として書かせたりする場合もある。もちろん、普通に個人的なエッセイとして書かせる場合もある。エッセイはおよそ400語から700語で書くことになっている。当然のことながら、教師は作文コンテストに応募することをあらかじめ生徒に周知させている。

第2に、生徒のエッセイは個人で書き上げられたあと、学級ないしはグループでの検討にふされる。これは、それぞれがエッセイに書いた内容を互いに説明しあう中で、人生の倫理的価値についていっそう認識を深めることをねらいとしてい

る。と同時に、文章表現や文の構成についての集団推敲をもおこない、エッセイを内容面でも表現面でもより洗練されたものにする。

第3に、こうして推敲されたエッセイを教師がSLTtoday.comのオンラインシステムを使って投稿する。その際、各エッセイはトピックス（話題）とトーン（情感）のそれぞれについて、次のカテゴリーのいずれに属するかを選択することになっている。すなわち、トピックスについては「家族」「忍耐」「成功」「失敗」「人間関係」「成長」「死」「決定的な出来事」のいずれか、トーンについては「真剣」「悲しい」「ユーモラス」「感化を受ける」「行動を促す」のいずれかである。

第4に、投稿されたエッセイは、本人と保護者の承諾を確認したうえで、SLTtoday.comのウェブサイトに掲載される。掲載にあたっては、キャラクター・プラスの担当者が事前に各エッセイについて内容面と文章表現面でしっかりと推敲されたものかどうかを確認する。掲載期間は1年間である。掲載期間中のエッセイは、学校名、氏名、学年、トピックス、トーンのそれぞれの項目にしたがって検索できるようになっている。

### (3) 「善い行ない」の表彰

これは“Do the Right Thing”と呼ばれる表彰制度で、地元テレビ局のKMOV 4 Channelが中心になって、キャラクター・プラスのほか警察、地域ジャーナル組織 Suburban Journals と連携して実施している。表彰の対象となるのは、小学校からハイスクールまでの子どもたちで、まさに“Do the Right Thing”（善い行ない）の名に価する行為をおこなっている者である。

表彰された子どもの「善い行ない」は、たとえば次のようなものである。

小学生のカムリンは、あるクラスメイトの家が火事で消失してしまったとき、自分に何かできることはないかと考えた。彼女はお金がいっぱいに入っている自分の貯金箱をそのクラスメイトにあげることにした。彼女の両親は、援助は大人のすることだと言って反対したが、彼女はそうした。彼女の行為は逆境に苦しむクラスメイトをどんな

に勇気づけたことだろうか。

ミドルスクールの生徒であるアンドリューは、近所の老夫婦が体の調子が悪くて買い物に行けないときに代わりに買い物に行くなどの手助けをし、その夫婦から感謝されている。彼は、援助が特に必要でないときでもその老夫婦のところに毎日行って、困っていることはないか確認する。推薦者のマーティン夫人の推薦理由にはこう書いてある。「アンドリューは遊びに出かける途中でも、私たちのところに立ち寄って、いろいろ手を貸してくれます。彼がいなければ、私たちはどうすればいいかわからないくらいです。」

表彰は毎月おこなわれ、学校や近隣で賞賛に価する子どもを知っている人ならだれでも自由に推薦することができる。推薦された子どもは全員、記念のTシャツと、地区法律遵守官 (area law enforcement officials) の署名入りの認定証をもらうことができる。そして、それぞれの学校の集会等でその功績が紹介される。

さらに、推薦された者の中から毎月10人が選ばれて、警察本部で特別表彰のセレモニーがおこなわれる。これには親、教師、法律遵守官、企業の代表者、メディア関係者などが出席する。そして、これらの受賞者については、テレビ番組の中で紹介される。

この表彰制度のねらいは、子どもたちに積極的な社会的行動を促すとともに、子どもたちのすぐれた行動に対して地域社会の大人たちが関心を向けるようにすることにある。

#### (4) ピース・ボール

これはキャラクター・プラスがおこなっている地域イベントである。このピース・ボール (Peace Ball) では、それぞれ参加を希望する学校において、1月の1ヶ月間、学校の全教職員が学校内で「平和な行い」をしている生徒を見つけると、そのたびに一本ずつ短い紐を与えていき、最後に生徒たちがすべての紐をピース・ボールという玉に巻き上げて、それを5月に開かれるピース・ボール・フェスティバルに出品し、お祝いをするものである。

紐は長さ12インチ (約30センチ) で、一人の子

どもが何本でももらうことができる。学校の教職員は、教師や事務職員、カウンセラー、看護師だけでなく、通学バスの運転手、用務員、カフェテリアの店員、ボランティアの補助指導員まで含めて、全員がこれに参加する。そして、子どもたちが他者への思いやりや親切な行為、寛容な態度、謙譲、自制、争いごとの解決など、平和な社会を築く上で大切だと思われる人格特性や行動を示していると認めたときに、それぞれ紐を与える。

2005年5月のフェスティバルの際には、全部で74個のピース・ボールが出品され、その重量は全体で60ポンドであった。1ポンド (約453.6g) あたりの紐の数は約2,300本であり、全体で約13,800本の紐が集められた計算になる。回転ボールに飾られた74個のピース・ボールは、この年のピース・ボールに参加した74校の生徒たちが1ヶ月間にのべでおよそ13,800回の「平和な行い」を実践したということを象徴している。

このピース・ボールは、学校対抗で競い合うものではない。その趣旨は、一人ひとりの日常における積極的な行動が積み重なって、学校全体に温かみのある平和な雰囲気がつくり出されることを、眼に見える形で象徴的に示すことにある。そして、重要な点は、このピース・ボールに学校のすべての職員が参加し、それぞれの職務や立場をこえて、生徒一人ひとりにみんなが関心を向けるようにすることである。

以上のようなピース・ボールの企画には、セントルイス・サイエンス・センターとゲートウェイ平和博物館 (Gateway to Peace Museum) が協力しており、さらにセントルイス郡警察学校、ペプシコーラ社、地元の手スーパーマーケットが後援している。

毎年5月のフェスティバルは、セントルイス・サイエンス・センターを会場に3日間にわたって開かれる。ここではピース・ボールの祝賀行事のほか、さまざまな種類のゲームや工作、アスレチックなどのセッションが数多く開かれ、子どもたちは6人ずつのチームでこれらのセッションに参加し、楽しみながら協同活動をおこなうことになっている。そして、これらの各セッションでは、ボランティアを申し出たハイスクールの生徒たちが

指導員を勤める。こうした点にも、このフェスティバル自体がキャラクター・エデュケーションの場として機能するように配慮されていることがうかがわれる。

#### (5) 「今月の言葉」

これは、地元テレビ局のKMOV 4 Channelがキャラクター・プラスと連携しておこなっている企画である。「今月の言葉」“Word of the Month”というのは、たとえば“respect”とか“patience”とか“responsibility”といったような人格特性(character trait)を言い表す言葉について、学校で子どもたちに自分の言葉で定義づけをおこなってもらい、それらの中からいくつかを拾い出して毎月1回テレビ番組の中で紹介するものである。定義づけには、特に決まった形式はなく、それぞれの学区ないしは学校で自由に組み込まれている。たとえば“respect”については「自分と、他人と、物品と、目上の者に敬意を示すこと」とか、“patience”については「不平を言わず、じっと待つこと」といった説明がなされる。子どもたちによるこうした短い定義づけは、学校の廊下などにも掲示される。

### 4. 連邦および州の補助金による研究プロジェクト

キャラクター・プラスは2002年から新たに2つの4年間にわたる連邦補助金を受け、これにより“Caring School Community Implementation Study”と“Missouri Show Me CHARACTERplus Implementation Study”<sup>7)</sup>という2つの研究プロジェクトに取り組むことになった。補助金はいずれも、2001年に成立した“No Child Left Behind Act of 2001”という法律<sup>8)</sup>にもとづいて支出されている。

前者の表題にある“Caring School Community”は、あえて日本語に訳せば「心の通いあう学校」とでも表現できよう。キャラクター・エデュケーションによる一種の学校再生プランである。このプロジェクトでは、キャラクター・エデュケーションが学校秩序の改善、生徒の所属感の向上、さらには学業成績の向上にどの程度効果があるか

について、実証的なデータを収集して研究が進められている。

後者のプロジェクトは、キャラクター・プラスが推進するキャラクター・エデュケーションが実際に各学校現場でどのような効果をあげているかを評価するための研究である。

以下、この二つの研究プロジェクトのそれぞれについて、研究内容を見てみることにしたい。

#### (1) 「心の通いあう学校」研究プロジェクト

この研究プロジェクトは、キャラクター・プラスがミズーリ大学セントルイス校教育学部およびワシントンDCにある発達研究センター(Developmental Studies Center)と連携して進めている実証研究である。このプロジェクトでは、発達研究センターが開発した「心の通いあう学校」のモデルをキャラクター・プラスに参加しているセントルイス拡大都市圏のいくつかの学校で試行し、このモデルの有効性を実証的に確かめることを目的としている。

「心の通いあう学校」モデルは、もともと“No Child Left Behind Act of 2001”がアメリカの学校文化の変革をうたい、学校をドラッグやいじめや暴力などのない安全で秩序ある学習環境に変えることをねらいの一つに掲げていることに対応したものである。

「心の通いあう学校」モデルでは“Autonomy”“Belonging”“Competence”の3つの言葉の頭文字をとって「心の通いあう学校」のABCと称している。“Autonomy”は、生徒一人ひとりの自由と自主性が尊重されるべきことを意味している。

“Belonging”は、生徒が自分たちの学校に対して所属感を感じるようにすることを意味している。“Competence”は、学業成績の向上はもとより学校生活のあらゆる場面で生徒が自分の能力を発揮できるようにすることを意味している。そして、「心の通いあう学校」モデルでは次の4つの実践に取り組むことになっている。

①「仲よし活動」(Buddy Activities) — これは、学年の上の生徒と下の生徒が二人一組でペアを組み、授業中に一緒に活動しながら学習を進めるものである。

②「クラス・ミーティング」(Class Meeting) — 学級や学校のかかえる諸問題を取り上げたり、行事やイベントの実行計画を策定したり、決まりや約束事について決定をくだしたりする生徒全員と教師が参加する討論の場である。いわば、学校の中のタウンミーティングである。

③「家庭の活動」(Homeside Activities) — 生徒が家庭で保護者と一緒におこなう簡単な活動である。たとえば、宿題を一緒にやったり、本の読み聞かせをおこなったり、短いレポートの作成に取り組んだりといったことである。

④「全校活動」(Schoolwide Activities) — 非競争的な集団活動(たとえばボールを使ったゲームとか、オブジェの組み立てなど)をおこない、協力の精神や協調性、人の役に立つこと、責任感などの育成を図る。

これらの実践はいずれも日本の学校では特に珍しいものではない。しかし、アメリカではこれらはまさに学校文化を変えるための取り組みとして位置づけられている。これまでどちらかと言えば、個人の自己主張に力点を置き、めいめいが学校で何をどれだけ達成するかに関心の中心を置いてきたアメリカで、いま、相手への気づかいや相互の承認、集団でなにかを成し遂げることの大切さを重視し、そしてなによりも学校の人間関係の改善をととして安全で秩序ある学習環境をつくりだそうとしていることは、とても興味深いことである。それに加えて、家庭で保護者にも学校の教育活動の一端を担ってもらい、学校と家庭の連携に意識的に取り組んでいることも注目される。

ただし、「心の通いあう学校」モデルで取り組む4つの実践は、日本の学校の「特別活動」などとは異なり、その多くは通常の教科の授業の中で、あるいは教科の授業に関連づけて取り組まれる。もちろん、「特別活動」に近い取り組みになる場合もある。

この研究プロジェクトでは、セントルイス拡大都市圏でキャラクター・プラスのプログラムをすでに実践している学校のうちから毎年10校ずつ選び出し、4年間で合計40校において「心の通いあう学校」モデルを実践することになっている。そして、これらの学校に教材・教具を無償で提供

し、校長を中心とした各校の指導チームに対して指導者研修を無償で実施する。指導者研修では、「心の通いあう学校」モデルについての理解と、実施計画の策定、実施過程でのデータ収集の方法、データにもとづく診断と次年度の計画策定について、一連のワークショップが開かれる。そして、4年間のプロジェクト実施をととして、順次実施1年目の学校、実施2年目の学校、実施3年目の学校のそれぞれの成果を比較分析することになっている。このデータ収集と診断・評価、成果の分析については、第2節(2)で触れた州補助金による「評価と診断」の取り組みに連動していて、それを拡大するものと位置づけられている。

さらに、ここで収集された各校のデータは、ミズーリ州初等中等教育局が毎年おこなっている学力検査のデータとつき合せて、「心の通いあう学校」モデルの実践が生徒の学業成績の向上にどの程度影響があるかを調査している<sup>9)</sup>。

## (2) ミズーリ州キャラクター・エデュケーション推進研究

第1節で触れたように、キャラクター・プラスでは1997年以来、連邦および州による補助金の交付を受けて、キャラクター・エデュケーションをセントルイス拡大都市圏からミズーリ州全体に拡大する事業に取り組んできたが、“No Child Left Behind Act of 2001”にもとづく新たな連邦補助金(2002年から4年間)の交付を受けて、この拡大事業をさらに継続している。この拡大事業では、1997年の開始以来、学校現場の指導スタッフに対する指導者研修に重点が置かれてきた。そして、指導者研修の一環として、それぞれの学校の現状と問題点を明らかにする学校診断と、キャラクター・エデュケーション実施後における評価・点検システムの構築がすすめられてきた。2002年からの新たな連邦補助金により開始された“Missouri Show Me CHARACTERplus Implementation Study”という研究プロジェクトでは、従来の評価・点検システムを基礎にして、キャラクター・エデュケーションの有効性を実証的に明らかにするためのデータ収集がおこなわれている。

この研究プロジェクトでは、ミズーリ州の各地から64校を選び出し、毎年そのうちの16校でキャラクター・エデュケーションを実施し、教材・教具の提供、指導者研修、評価・診断などの支援を受ける。そして、4年間で順次64校すべてでキャラクター・エデュケーションを実施していく。その間、実施1年目の学校、実施2年目の学校、実施3年目の学校、そしてまだ実施していない学校のそれぞれについて、各校から集められたデータにもとづき、学校環境の改善と学業成績の向上に関して比較調査がおこなわれる。要するに、この比較調査研究により、これまでセントルイス拡大都市圏においてキャラクター・プラスが開発に取り組んできたキャラクター・エデュケーションのガイドラインや指導者研修、評価・診断システムなどの有効性を、ミズーリ州の他の地域において実証的に検証しようとしているわけである<sup>10)</sup>。

既にキャラクター・プラスでは、1997年から開始された拡大事業の成果をもとにして、一般の学校でキャラクター・エデュケーションの取り組みに着手するためのガイドブックを作成し、ミズーリ州初等中等教育局の協力を得て全州の学校に配布している。ガイドブックは全部で4冊あるが、そのうち3冊はキャラクター・エデュケーションに取り組む態勢づくりや組織作りの手順、さまざまなアイデアや実践例などを紹介するガイドブックであり、1冊は評価・点検の進め方のガイドブックである<sup>11)</sup>。2002年からの拡大事業では、これらの出版物にまとめられた成果をさらに精緻にしていくことがめざされている。

## おわりに

キャラクター・エデュケーションは、特定の哲学や教育理論に依拠するものではなく、公立学校本来の教育目標とされる「良識ある市民」の育成を、学校・家庭・地域の連携の中で達成しようとするものである。その意味で、キャラクター・エデュケーションは、価値観の多様化が進み、子どもたちを取りまく社会環境が大きく変化している中で、アメリカ社会が依然として草の根の部分で保持している健全で良識ある市民のモラルに依拠しながら、いま一度公立学校の教育を立てなおそ

うとする公立学校健全化の運動だと見ることができる。

本稿で紹介を試みたミズーリ州におけるキャラクター・プラスの取り組みは、キャラクター・エデュケーションのそうした草の根的な性格を比較的好くあらわしているように思われる。特に、第3節で見た各種の地域連携事業は、私たち日本人の眼からすれば、アメリカでもこのような青少年健全育成活動に近い取り組みを大真面目におこなっているのかと、多少の驚きさえ感じさせるところがある。草の根の市民レベルで見れば、日本もアメリカもたいして違いはないことがわかる。

学校で取り組まれるキャラクター・エデュケーションそのものにしても、コア価値として設定される人格特性は「誠実」「思いやり」「責任」「勇気」「公正」「忍耐」など、常識的で伝統的な諸価値が並べられている。そこに示された人格特性は、どれもこれも一般市民の日常生活において「常識」ないしは「良識」と見なされているものばかりであり、なにか特定の哲学や宗教に裏打ちされたものというわけではない。それだけに、キャラクター・エデュケーションで取り上げられる人格特性は、それらを正面から否定しることがだれにもできない常識の強さともいえるようなものをもっている。

キャラクター・プラスでは、コア価値の設定とそれらの定義づけはそれぞれの学区ないしは学校で教師と父母と地域住民代表とが協議して決めることになっており、そのためのガイドラインをセントルイス拡大都市圏の学区連合が大学などの研究機関の協力を得て作成している。キャラクター・プラスは、一般行政から独立した教育行政の基礎単位である学区を主体にして推進されており、その点で一般市民の「良識」に依拠した「世俗性」ないしは「中立性」が比較的好く保持されるようになっていいると見ることができる。公立学校の運営に関して、地域住民による自治の原則が長い伝統となっているアメリカならではの「良識」と言えるかもしれない。

キャラクター・エデュケーションがこうしたアメリカ社会の草の根的な「良識」に依拠するものだとするれば、当然のことながら、その取り組みは

平凡で堅実で保守的なものにならざるをえない。ここで保守的というのは、政治的な保守主義とは直接には関係なく、平穏な市民生活を保持するという程度の意味であり、子どもたちを犯罪や暴力、麻薬、十代の妊娠などから守り、堅実な生活者として良識ある市民に育てることを意図するものである。キャラクター・エデュケーションが学校を安全で秩序ある学習環境に変える取り組みとしての側面をもっているのもそのためである。

しかし、この草の根的な「良識」に依拠するキャラクター・エデュケーションは、特定の理論から出発したものではないとはいえ、9.11 (September Eleven) 以後の、星条旗がよく目立つようになった今日のアメリカ社会の状況とどこかでつながっていることもまた確かである。なぜなら、キャラクター・エデュケーションは根本的なところで、ある明確な立場を前提にしているからである。その前提とは、アメリカの公立学校はこの国の建国以来「良識ある市民」の育成をこそその重要な使命としてきたという認識である。この認識にたつて、キャラクター・エデュケーションは、独立宣言と合衆国憲法に示されている自由と民主主義の価値を基準に、それを体現する人格特性を育成するものと自らを意義づけている。ここでは、日常生活において「良識ある市民」としてだれもが身につけるべき人格特性と、アメリカン・デモクラシーの体制に忠誠を誓うアメリカ国民であることが、素朴にも理屈抜きにつながっている。この素朴さが、おそらくはキャラクター・エデュケーションの最も大きな特徴であろうし、また問題点なのかもしれない。この点は稿を改めて検討してみることにしたい<sup>12)</sup>。

最後に、キャラクター・プラスに参加しているセントルイス拡大都市圏のある小学校長のコメントを紹介しておきたい。「キャラクター・エデュケーションに着手するときには本腰を入れて取り組まなければなりません。最初はわざとらしいことに思えるかもしれませんが、今や私たちにとっては、これが私たち自身の自然の一部なのです。」<sup>13)</sup> キャラクター・エデュケーションの一つ一つの実践は、取り立てて人目を引くようなものはほとんどなく、いまさらと思うような平凡で常識

的なものが大半である。しかし、その平凡で常識的なものの積み重ねこそが、キャラクター・エデュケーションの本領なのだろう。その是非は慎重に検討されなければならない。

## 追記

本稿の執筆にあたっては、セントルイス拡大都市圏の学区連合 (Cooperating School Districts) の所長 (Director) であるリッツ・ギボンズ (Litz Gibbons) とミズーリ大学セントルイス校教育学部教授のマービン・バーコビッツ (Marvin Berkowitz) の両氏から多大な助力をいただいた。ただし、本稿の記述の一切は筆者 (小柳) が責任を負う。

## 註

- 1) ここで学区 (school district) というのは、日本の通学区とはまったく異なり、一般行政から独立した教育行政だけの行政区画である。人口約35万人のセントルイス・シティーは、それだけで一つの学区を構成していて、管内のすべての公立学校および一般市民向け公共教育機関を運営しているが、セントルイス拡大都市圏のその他の地域では、一つの学区がいくつかの小規模な一般行政区域にまたがって構成されている場合が多い。
- 2) *Replication Handbook for School And Community Decision Makers*, published by CHARACTREplus/Cooperating School Districts of St. Louis, revised 2002, pp. 4-7.
- 3) サービス・ラーニングというのは、アカデミック教科の学習内容に関連した地域貢献活動 (community service activities) を授業計画の中に組み込み、生徒たちが教室で学んだ内容を実地に生かす体験を通して、知識や概念のより深い理解と、問題発見能力や問題解決能力の育成を図り、さらには学習意欲や動機づけを高めることをねらいとした新しい学習法である。サービス・ラーニングの主眼は、あくまでもアカデミック教科の学習効果を高める点にあり、その点が一般的な奉仕活動や体験学習とは異なっている。サービス・ラーニングは、主としてミドルスクール、ハイスクール、カレッジのアカデミック・カリキュラムの中に取り入れられるケースが多い

が、小学校から大学までのすべての学年段階で実践が試みられている。

- 4) 共同学習というのは、教室での従来の学習が競争的で個人的な関係の中でおこなわれることが多かったのに対して、能力の異なる生徒を数名ずつのチームに組み、チームで助け合いながら学習を進めることで、学習効果を高めることをねらいとした学習法である。
- 5) ピア・メンタリングというのは、主としてカレッジの段階でおこなわれている活動で、比較的優秀な学生がメンター（mentor）として登録されて、他の学生たちの学生生活や勉学上の相談にのったり、いっしょに問題解決にあたったりする一種の互助活動のことをいう。メンターとなる学生は、特別にチームを組織し、一定の期間研修を受けることになっている場合が多い。ピア・メンタリングの手法は、ハイスクールなどにも取り入れられ、初歩的な形では小学校などでも実践されている。
- 6) マービン・バーコビッツ教授は、サンフォード N. マクダネル氏の寄贈によってミズーリ大学セントルイス校に開設されたキャラクター・エデュケーションの教授職（Sanford N. McDonell Endowed Professor of Character Education）を勤めている。
- 7) この研究プロジェクトのタイトルに使われている“Show Me”とは「証拠を見せろ」という意味であるが、同時にこれはミズーリ州の俗称“Show Me State”の“Show Me”でもある。
- 8) この法律の名称になっている“No Child Left Behind”とは、直訳すれば「一人の子どもも放ってはおかない」というような意味である。この法律は、“children-at-risk”と呼ばれる低所得階層の学業不振の生徒たちに対する成績格差解消を一つの大きな政策目標にしている、そのためにアメリカの学校文化を変えることをうたっている。その中身は、親の学校選択権の拡大を通じた公立学校制度の自由化や、従来のヘッドスタートやバイリンガル教育に関する補助金を州当局が地方の実情に応じて別の事業にも自由に使用できるようにするなど、いくつかの問題点をもっていると言われており、識者の間で批判が多いようである。
- 9) この研究プロジェクトによる調査研究の内容は、次のペーパーで読むことができる。Jon C. Marshall, Sarah D. Caldwell, Linda McKay, and Judy Owens, “Caring School Community: Two-Year Implementation Study,” Paper Presented at American Educational Research Association Annual Conference at Chicago, Illinois, April 21, 2003.
- 10) この研究プロジェクトによる調査研究の内容は、次のペーパーで読むことができる。Jon C. Marshall, Sarah D. Caldwell, Linda McKay, and Judy Owens, “CHARACTERplus Program Implementation: Three Years of Results,” Paper Presented at American Educational Research Association Annual Conference at Chicago, Illinois, April 21, 2003.
- 11) 4冊のガイドブックは以下のとおりである。  
*Character Education Connections*, published by National Professional Resources, Inc., 1999 (revised 2002); *Evaluation Resource Guide*, published by CHARACTERplus/Cooperating School Districts of St. Louis, 1999 (revised 2002); *Replication Handbook for School And Community Decision Makers*, published by CHARACTERplus/Cooperating School Districts of St. Louis, 1999 (revised 2002); *Show-Me Character Idea Book*, published by CHARACTERplus/Cooperating School Districts of St. Louis, 2002.
- 12) とりあえずは次の論文を参照。Marvin W. Berkowitz, “Civics and Moral Education,” in B. Moon, S. Brown, and M. Ben-Perez (Eds.), *Routledge International Companion to Education* (New York: Routledge, 2000), pp. 897-909.
- 13) “Character and Citizenship: Are Schools Safe Without Them?,” *The Challenge*, Vol. 12, No. 4, 2005, Department of Education’s Office of Safe and Drug-Free Schools, p. 7.